

# 提言書（案）

## 目次

1	はじめに .....	3
2	富士見市の現状 .....	3
3	「つながり」の大切さについて .....	5
3-1	3つの観点から見る「つながり」の必要性 .....	5
①	自己成長の観点から .....	5
②	相互成長の観点から .....	5
③	「居場所づくり」という観点から .....	6
3-2	世代をこえる重要性 .....	6
①	多様性のある「つながり」のため .....	6
②	未来に向けた「つながり」のため .....	6
3-3	富士見市生涯学習推進基本計画から .....	7
4	提案「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」 .....	7
①	既存団体・活動を盛り上げ、適切に広報する .....	7
②	参加することへの負担感を減らし、つながることのメリットを知ってもらう .....	8
③	子どもたちを中心に考える .....	8
5	具体的な取組の提案 .....	9
6	おわりに .....	9

## 1 はじめに

第33期社会教育委員会では、世代間のつながりの希薄化に焦点を当て検討していくことにしました。各委員が日頃携わっている社会教育活動を振り返った時に気が付くのは、30代や40代といった、所謂現役世代の社会教育活動への参加が60代や70代などの他の世代と比較して少ないという現状です。

特定の世代の社会教育活動の参加率が低いということは、つまり世代をこえたつながりが形成できていないという可能性が考えられます。世代を問わず、他者とのつながりを持ち、関わり合いを持つことは重要なことではないでしょうか。様々な世代の方が一緒になって活動すること、つながりを持つことでしか得られない気付きや学びがあります。人生100年時代と言われる現代において心豊かに生きていくためには、世代をこえたつながりは大切なものであると私たちは考えます。

しかし、富士見市の社会教育活動を見ると、上述のとおり、世代をこえたつながりについて、十分に築かれているとは言い難いのが現状です。世代を問わず、誰もが一緒になって活動できる場がなくなってしまうのも、その要因の一つだと言えるのではないのでしょうか。

以上のような現状を鑑み、第33期社会教育委員会として、世代をこえたつながりづくりについて検討し、提言書としてまとめます。

## 2 富士見市の現状

地域で行われている諸活動について、参加者の固定化や高齢化、若手人材の確保等が課題として多く指摘されています<sup>1</sup>。これは各種アンケート等からも見ることができます。令和元年度に実施された生涯学習に関する市民アンケート<sup>2</sup>では、現在行っている活動を問う設問に対し、23%が「活動を行っていない」と回答しています。一定程度の市民が生涯学習活動に取り組んでいないことが伺えます。また、その理由については、43%が「仕事が忙しくて時間が無い」、

<sup>1</sup> 『令和4年度（令和3年度実施事業）事務事業点検・評価報告書』「基本方針Ⅱ学びあう地域社会をめざす教育の推進」で、複数課から課題として挙げられている。例えば「各種事業の参加者が依然固定化している」（p.49）、「子育てサロン：若手保育サポーターの確保」（p.51）など。

<sup>2</sup> 生涯学習に関する市民アンケート

調査対象：①市内在住で満18歳以上の男女1,000名を無作為抽出

②公共施設利用者（公民館・交流センター・コミュニティセンター）120部

調査時期：令和元年11月1日（金）～11月29日（金）

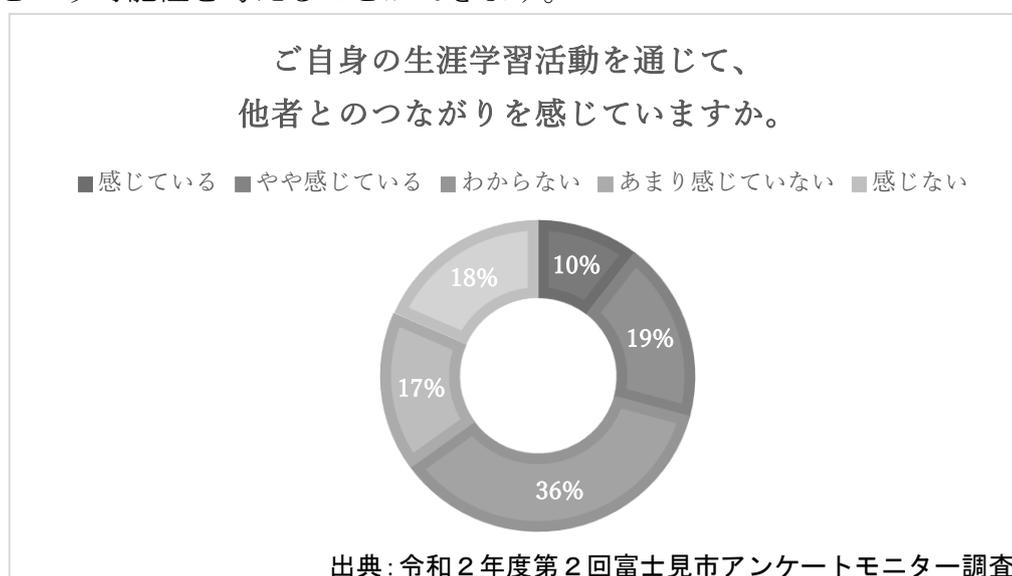
調査方法：①郵送発送・郵送回収（同封の返信用封筒）無記名アンケート方式

②公共施設窓口にアンケート用紙を設置・窓口回収

21%が「家事・育児が忙しくて時間が無い」と回答しています。

仕事や家事・育児が生活の中心になる世代については、生涯学習活動に参加する際のハードルが他の世代よりも高いと考えることができるのではないのでしょうか。

令和2年に実施されたアンケートモニター調査<sup>3</sup>では、「ご自身の生涯学習活動を通じて、他者とのつながりを感じていますか。」という問いに対し、7割の人が「わからない」「あまり感じていない」「感じない」と回答しています。中でも特に注目したいのは、「わからない」と回答している人が、36%にも上ることです。「わからない」と回答するという事は、普段の生活の中で他者とのつながりを全く意識していない、そもそも他者との関わりについて関心が無い、という可能性を考えることができます。



他者とつながることのメリットを知らない、他者とつながりたいと思っているがつながりを築けない、そういう人がいるのであれば、社会教育の観点から、対策を考える必要があります。

人と人とのつながりの中でこそ得られるものもあるでしょう。生涯学習活動を通してつながりを築くことのメリットを知ってもらうこと。また、他者とのつながりを必要と考えるか、不要と考えるか、そしてどのようなつながりを求めるか、それはその人の環境やライフステージなどによって変化するものです。つながりを持ちたい、必要だ、と思ったその時に、その人がきちんとつながりを築け

<sup>3</sup> 令和2年度第2回富士見市アンケートモニター調査

調査対象：富士見市アンケートモニターに登録された市民467名

調査時期：令和2年8月13日（木）～令和2年8月19日（水）（7日間）

調査方法：web調査

るような環境を整えること。

生涯学習活動を支援するその一環である社会教育においては、この2点が求められるのではないのでしょうか。

### 3 「つながり」の大切さについて

#### 3-1 3つの観点から見る「つながり」の必要性

人とのつながりを持つということ、他者と関わり合うということは、そこに「居場所」をつくるということだと考えます。「居場所」、「自分はここにもいいのだ」と思える場所があることは、非常に重要なことではないのでしょうか。

公民館で、図書館で、自宅で、様々な生涯学習活動が行われています。心豊かな人生を送るため、一人ひとりが生涯学習活動に取り組むことは重要なことです。しかしその学びを「個」で終わらせることなく、他者とのつながりを形成していくこと、生涯学習活動を通して「居場所」を見つけることが、なによりも重要なことではないのでしょうか。

本提言書では、3つの観点から「つながり」の重要性を整理しました。

#### ① 自己成長の観点から

他者とのつながることによって、視野を広げて物事を見ることが出来ます。新しい気付きを得るきっかけにもなり得るのではないのでしょうか。自分の日常内で築く関係の、その枠を飛び越えて他者とのつながることができれば、自分だけでは発見できないような気付きを得ること、新しい価値観を持つことができるようになり、レジリエンスを高める効果にも期待できるでしょう。

#### ② 相互成長の観点から

人とコミュニケーションをとる中で、人に教えてもらうありがたさを知り、人に「教えて」と頼ってもらう喜びを知ることが出来ます。そして他者から感謝されることの感動に気付き、自己成長へのきっかけにつながっていきます。そして人とのつながることが自己成長のきっかけとなるように、相手にとっても成長の機会を与えているということであり、相互に高め合うことが期待されます。

### ③ 「居場所づくり」という観点から

あらゆる立場の人にとって、「居場所」があるということは幸せです。他者とつながることにより、同じ気持ちや環境について理解し合うことができ、また組織やコミュニティにおいて帰属意識があれば、安心感や自己肯定感を得ることができます。人は他者とつながることで、そこに「ここに居てもいいんだ」と思える場所、居心地がいいと思える場所、すなわち「居場所」をつくることのできるのではないのでしょうか。

## 3-2 世代をこえる重要性

そして、私たちは「世代をこえた」つながりを特に重視したいと思います。それは、多様性のある「つながり」、そして未来に向けた「つながり」、この2点からです。

### ① 多様性のある「つながり」のため

他者とつながることのメリットの1つとして、新しい気付きを得るきっかけになるというものを挙げました。同じ世代であっても、もちろん考え方が異なる人同士が集まることで自己成長や相互成長につながる機会となり得ると思います。しかし、世代をこえた人々が集まることで、更なる効果を期待することができるのではないのでしょうか。世代が異なれば置かれている環境等は大きく異なります。異なる背景による様々な価値観や考え方の、様々な世代の人が一緒になって活動することで、今までにない考えやアイデアなどが生まれてくるのが期待でき、より大きな気付きや学びを得ることができるものだと考えます。

### ② 未来に向けた「つながり」のため

現在富士見市では様々な社会教育活動が行われています。しかし「富士見市の現状」で述べたように、未来へとつながることなく、次なる担い手の不在により、次世代へとつながることなく、そこで活動が途切れてしまう恐れのある活動も少なくありません。意志ある人達によってはじめられた活動が途切れてしまうのは、とても残念なことであり、富士見市の社会教育にとって大きな損失と言えるでしょう。社会教育に資する活動が途切れることなく、次の世代にも引き継がれていくようにするためにも、世代をこえたつながりを形成することは、重要なことではないのでしょうか。

### 3-3 富士見市生涯学習推進基本計画から

富士見市の社会教育行政についても確認しておきます。「市民一人ひとりが、安心して生活し、行政との協働のもとで、いつでも、どこでも、いつまでも自発的に学習をすすめ、そのことを通して、すべての市民が互いを尊重し、心豊かに暮らせるまちづくりの実現を目指す」ことを基本理念として、富士見市生涯学習推進基本計画が策定されています。

生涯学習とは、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものです。しかし、富士見市が掲げるのは「心豊かに暮らせるまちづくりの実現」であり、それは個人で達成されるものでは決してありません。「まちづくり」である以上、個人ではなく地域住民が一丸となって成し遂げていく必要があるのではないのでしょうか。富士見市が掲げる理念を達成するためには、まずは、市民一人ひとりが生涯学習に興味関心を持ち、生涯学習に取り組むこと。そして、他者と相互につながりを形成し、学びから得た成果を個人に留めることなく社会に還元していくことが必要となるのです。

## 4 提案「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」

生涯学習活動を通して「居場所」を見つけることは重要なことと言えるでしょう。「ここにいてもいいんだ」と思える居場所が、個人の活動の中に、他者との関わり合いの中に、誰もが持てるような社会になってほしいと思います。前者を否定するわけでは決してありませんが、3-1で述べた通り、社会教育の観点から他者とのつながりの中にある居場所づくりを推進していくことが必要ではないのでしょうか。

では、どのような居場所があれば世代をこえた人々がつながりを持てるのでしょうか。居場所に来た人たちが、どうやったら充実感を得ることができるのでしょうか。

第33期社会教育委員会議で検討した結果として、以下の3点が重要と考えました。

### ① 既存団体・活動を盛り上げ、適切に広報する

つながりづくりについて考えた時に、まずは、諸活動に対して積極的な人達の活動を盛り上げ、魅力を高めることが必要ではないのでしょうか。そして、実際に活動している人のいきいきとした様子を適切に広報することで、興味がある人

を増やし、活動の輪を広げていくことが重要です。

そのためには、行政として、必要があれば活動の補助をすること。そしてしっかりと情報発信をすることが必要です。行政における情報発信は、市のホームページや、広報「富士見」、公民館だよりが主なものだと思いますが、さまざまな世代を巻き込むためには、検索した時にしっかりとヒットするよう、ホームページやSNS上での情報発信をしっかりと行っていくのが必要ではないでしょうか。スマートフォンが広く普及した今、興味がある人はまずインターネットやSNSで検索をして情報を収集します。その時にしっかりと情報がヒットすること。そしてヒットした情報が魅力的に写ることが、多くの世代、特に若い世代を巻き込む上では重要です。

またそれに伴い、活動や団体の寛容性を高めることが求められます。同質性が保たれていることに心地よさを感じてしまうため、同じ年代、同じ価値観の人との交流で終わってしまいがちで、排他的になってしまう団体や活動というものもあります。それだと旧態依然とした組織になってしまいます。新しい人は、新しい発見をもたらしてくれる人、という考え方が必要です。行政として活動や団体の運営に携わっているのであれば、新しい人が参加しやすい雰囲気づくりも重要です。

## ② 参加することへの負担感を減らし、つながることのメリットを知ってもらう

新しいことを始めるということは、どんなことであれ心理的負担が伴うものです。また、つながりを築くための活動が、義務感や負担感を生じさせるものであれば、そこに参加したいと思う人はいないでしょう。仕事や子育て等、日々の生活を忙しく過ごしている人にも参加して貰うためには、できる人が、できる時に、できる範囲で参加する、という緩やかな仕組みづくりが必要です。

また、なにかに興味を持ち活動や団体に参加したときに、すべての人が継続していくわけではありません。「楽しい」と思う人が続けて活動していくことで、つながりが形成されていくのではないのでしょうか。「楽しい」と思う感覚は人によりそれぞれでしょう。多くの人につながりを築いてもらうためには、さまざまな「きっかけ」があることが必要です。

「できる人」の「できる時」に、その人が興味を持てるような情報が入るよう、細やかな情報発信が重要です。

## ③ 子どもたちを中心に考える

子どもたちを中心に考えることは、とても重要なことだと言えるのではない

でしょうか。もちろん、子どもたちの健やかな育成のため、という観点もありますが、子どもたちに他者とつながること、地域で活動することの土壌を作るという観点からも、その重要性を指摘することができると思います。活動を子ども自身が楽しむことはもちろん、「大人って楽しそうだな」と感じてもらうこと、親子で参加してもらって、家庭で「今日楽しかったね」と共有してもらうこと。そういったことの積み重ねの中で、自分も将来そういう大人になりたいという思いが芽生え、それがまた次の世代に繋がって、他者と繋がる事を当たり前と感じるサイクルが生まれていくのではないのでしょうか。そのためには、地域と家庭、学校とがしっかりと連携して、子どもたちを地域で受け入れる環境を整備していくことが重要です。

また、子育てをしている世代とつながりを築くためにも、子どもたちを巻き込むことは有意義と言えるでしょう。たとえ小さなものであっても、共通した目的意識や課題認識があった方が、人と人がつながるきっかけとしては機能しやすいのではないのでしょうか。

世代をこえた人々がつながりを持ち、そのつながりの中で充実感を得るためには、どのような生活サイクルであっても参加できる「居場所」である必要があります。強制力のない、その人自身がその「居場所」を選択できること。そして、その「居場所」に拘束されないこと。つまり、「ゆるやかな関係づくり」が必要であるといえるのではないのでしょうか。そして「ゆるやか」であるからこそ、求めている人にしっかりと情報が届くよう、広報活動の更なる充実が重要であると言えるでしょう。

## 5 具体的な取組の提案

- ・時代に合わせた、参加へのハードルを下げられるようなシステムづくり
- ・地域と学校、保護者がうまくつながれるようなシステムづくり

## 6 おわりに